九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

国語の母音同化

春日，政治
九州大学名誉教授，学士院会員

https://doi.org/10.15017/12362

出版情報：語文研究. 4/5, pp.1-7, 1956-10-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

国語の母音同化

春日政治

一

母音同化とは、言語の音声変化の一つであって、一語の中の或母音がそれに隣接する（前後を問わない）他の母音に調子を合せて変化する現象をいう。ウラル―アルタイ語族の言語のうちには、母音諸調という性質のあることを特徴としていて、一語の中の母音を同一母音若しくは同性母音でそろえる癖がある。日本語にも上代に於て、この性質に近い傾向の存していたことは、学者によって相当観察されているが、自分のこゝにいう母音同化とは、全く同一母音にそろえることだけを指すのであって、かの母音諸調よりも一層単純化されたものと考えてもよい。国語のこの性質は、上代から相当けざやかに見えるが、今日までももち続けて来たと言ってよい。自分は先ず奈良朝の古典を読んで、この事に興味をもち初めたのであるが、そこには、㈠同一母音をそろえて成立つ語彙の多いこと、㈡語の音声変化をする際その中の或母音に引かれる事実の多いことの二つは、何人も気附く所であろう。爾来広く一般の文献について、常にこの事に注意して、その都度覚書をして来たのであって、多少は書いたり話したりしたこともあるが、今この覚書にいさゝか順序を立て分類を試みたのがこの小稿である。切に識者の教を乞う次第である。

ことわって置くが、この記述では、所謂上代特殊仮名遣による音の差別には触れない。触れないでも、この論はおのずからそれらをも包摂して、さしたる錯誤には陥らないと思うからである。

二

第一、国語の語彙には同一母音をそろえたものの多いこと。先ず原始言語と見るべき感動詞に、アヤ・アナ・アハレなどいい、擬音・擬態の語にコヲロコヲロ・カワラ・サワサワ（以上擬音）トヲヲトヲヲ・スブスブ・スクスク・ナマナマ（以上擬態）などが古典に見える。名詞に至っては、コト・モノ・トコロ・ココロ、ヤマ・カハからイシ・ミ

チ、アヤ・ニシキはたコロモ・ハカマなど挙げるに暇がなく、地名にもオノゴロ島・イチキ島・サガラカ（相楽）などよくも母音をそろえたものである。（以上は古事記に見える例）更に動詞や形容詞の語幹（実質部）を見ると、アカル・シキル・ツクル・オソル・カカヤク・オドロク・ヨロコブ・ワダカマル・トドコホル、さてはアマシ・イミジ・クスシ・オモシ・アタラシ・ウツクシの類は相当の数に上る。副詞にはマタ・ハタ・マサニ・サラニ・コトニ・ヤガテ・モトモ・コトゴト・ホトホト・大カナカ・ハナハダ・カナラズなどがあり、尚古い接頭辞にはトヨ（豊）・トコ（常）・ニギ（和）・ウヅ（珍）・ニヒ（新）・モロ（諸）などがあって、体言修飾にもこの種同母音語が栄えたことがわかる。

更にこの母音同化語の中には、二様の形をもつものもある。アナ（感動詞）――オノ、タナグモル――トノグモル、ハダラ――ホドロ、タワワ――トヲヲ、ワナナク――ヲノノクなどがこれであって、この場合もその一部の音が変るのでなくて、全部が一様に同化して変るのが、この特性である。古今集にココロをケケレといった例があるが、甲斐歌としてあるから、方言的に見るべきものであろう。

以上の如き国語の語彙は、他国語のそれに比して著しく多いようであって、国語の母音をそろえることの強い現われであると言ってよい。勿論これらのうちにはその発生の経路の考えられるものがあって、言葉の動きともいうべきものを見得る。例えば前掲の語のうち、かのハカマはハクモ（穿く裳）、コロモはキルモ（著る裳）であると、早くよりいわれたが、フスマを「臥す裳」と考えられるのと合せて、一説として取り得るものである。即ちハカマは頭の母音に同化し、コロモは尾の母音に同化したものと見ると、順行同化、逆行同化の好適な型になる。

かくて、第二、合成語をなす時の変音を見なくてはならない。古典からの例であるが、

アマツカミ　　アメ（天）
ヨモツシコメ　　ヨミ（夜見）
ヲトツハタテ　　オチ（遠）

の三つは共に同一型の合成語であるが、みな下の語（単独に呼ばれる形）の変音であって、その際に皆頭の母音に同化したものである。万葉集に「我が大君」のワガを仮名書きにワゴ（和期）と書いたのが、十一カ所に見えるが、これは助詞ガが後続のオホというオ母音に引かれたのであって、所謂逆行同化である。この語のこれほど頻用されているのを見ると、万葉時代には已に熟語となって、世間普通の語形であったらしい。ツキヨ――ツクヨ、クキダチ――ククダチ、クチワ――クツワ、コトドマリ――コトドモ

リ、オイヅク——オヨヅク、ヨモヤモ——ヨモヤマなどは、こゝに出るべき例であろう。今ヲトトヒという語は、語源的にヲチツヒ（遠つ日）の義であるが、万葉集にはヲトツヒとなっていて、チが上のヲのオ母音に引かれてトとなったのみであるのに、平安朝のヲトトヒは更にツが同化したものであって、時代的に漸次同化していった跡がわかる。又フトコロ（懐）は、奈良朝の末のものと見える小川本華厳音義にはフツクロとあり、下って名義抄にフツコロとフトコロとがあり、更に今日俗にホトコロという。かくてこの語は先ずクがコとなり、次にツがトとなり、更にフがホとなった段階を歴ていることがわかる。ヲトトヒは順行同化、ホトコロは逆行同化のよい例である。

因みに右の例として引かるべきに似たカナモノ・サカヅキ・カザムキ・ナハシロなどの語はこれを避けたいのである。これらは上のア母音の影響でア列音に変ったものだとも見られるが、イナボ・フナビト・スガゴモ・シラギク・コワイロの類の語も多くあって、上の母音に関係なくア列音に変っている。テ（手）がタモト・タムダクなどの語を作り、メ（目）がマブタ・マドロムなどの語を作るのも同じであって、上の語末を等しくア母音に変ずるものである。これらの事柄を総合すると、ア母音は語を接続融合させる一種の音であったように考えられからである。後の類を前の類の類推から来ているとも言われようが、次に述べる条の自動詞を他動詞に、他動詞を自動詞に変造し、動詞の継続形を作り、並びに動詞を形容詞化する場合にも、主としてア母音の力を借る点などを考えると、前例のア列音化は軽卒には見られないのである。

三

第三、語詞の分化による変音。先ず動詞の自他対応の出来方に注意する。

（甲）自動詞にスをつけて他動詞を作る際は、その語幹末を変じてア母音とするのが通則であって、即ち「アす」と変るのである。ウゴク——ウゴカス、チル——チラス、ツヒユ——ツヒヤスの如くである。しかるにオク——オコス、オヅ——オドス、トヨム——トヨモス、トドロク——トドロコスの如く「オす」となる一類があるが、これは上のオ列音に同化されていることが明らかである。この同化は崇敬のスを取る際も同じであって、古典に「織ろす」という形が見え、オモホスなどは常のことである。「聞こす」・「知ろす」など少数の例外は、多きに類推した用法であろう。次に注意すべきは、ウルホス・スゴス・クルホス等の如く上のウ母音のものも、同じくオ母音になることで

ある。これらは通則のア母音がウ母音の為に動いて、アとウとの中間母音オを取ったのであって、亦一種の同化である。只完全なものではなく、半同化若しくは同性同化ともいうべきものである。又一種特殊なのは、スグ——スグス、ツク——ツクス、フル——フルス、ユル——ユルスなどであるが、これらの「ウる」は上のウ母音の為であって、亦完全な同化である。

（乙）次に他動詞の語幹末を変じルを附して自動詞を作る型がある。それはカフ——カハル、スツ——スタル、トグ——トガル、トドム——トドマルなどの如く、語幹末を「アる」にして亦ア母音に変わるのが通則である。しかるにこれにも例は少いが、オク——オコル、ノゾク——ノゾコル、トトノフ——トトノホルなどがあって、上の音に同化してオ母音を取るのである。これにもツム——ツモル、ククム——ククモルの如き、半同化のものがある。

（丙）動詞の所謂継続形をつくるには、チラフ・ナゲカフ・ヨバフ・マジラフの如く、亦その語幹末を「アふ」に変じて、ア母音を取るのが通則であるのに、これにもオトル——オトロフ、ヨソフ——ヨソホフ、ヨロブ——ヨロボフ、モトホル——モトホロフなどの同化形があり、ウツロフ・カクロフ・ススロフ・ツクロフの如く、ウ母音を受けた半同化形もある。キシロフの如きは多き例に類推したものと見る方がよいであろう。

（丁）動詞より転ずる形容詞の形。この型は動詞の語尾の母音をアに変じ、形容詞語尾をつけるので、「アし」となるのが通則である。イタマシ・ネガハシ・ホコラシなどの例をあげるまでもないが、亦オソロシ・タノモシ・ヨソホシ、古くはイキドホロシ・ヨロコボシなどのオ母音に同化した類が相当にある。クルホシなどの半同化も僅かにあり、コヒシ・ワビシ・サビシ・サブシ・イツクシなどは例外の奇形である。

附けたりとして、ラカ・ヤカを語末にもつ情態言も、上に来る母音によって、オホロカ・マリリカ・ユルルカ・ニコヨカ・フクヨカなど変るのも同じ原理である。

第四、同語根の対応語。同語根から分化した語の同属性を有する語同志は、互に母音の同化を以て相対応することがある。カマ——コモ、サバ——シビ、サハラ——シヒラ、スズメ——サザキ——シジミの如きがこれである。又同語根から出て、種々の語に分化してゆくもので、同化母音を取ることがある。クチ（口）から出て、コト（言）カタル（語）、フチ（縁）から出て、ハタ（端）ホトリ（辺）、ウツ（打）から出て、オト（音）・アタル（当）となる如き、ハサム——ヒシグ——ホソシ——ホソグ（フセグの古形）なども、亦母音同化で種々の語を分化しゆく一例である。こ

の事については、かつて語彙雑考（国語学第十七輯）で述べたことがあるから、詳細はそれに譲ることにする。

四

第五、俗語に於ける訛音。矯正されることもなく自由奔放に発音している社会の口の動き方ほど、無垢にその特性を露出するものはない。それは俗語とか方言とかいうものに求めるが最もよい。泥酔した情態をヘベレケといい、貧小な形容をミミッチイといったり、ツゴモリをツグムル、ヒステリーをヘステレといったり、フスベ（黒子）をホソビ、キリギリスをコロコロシといったりするのに、いかに母音同化の力の動いているかを見るであろう。現代国語のこの方面については書いた人もあり、誰も常に接していることであるから、自由の観察にお任せして、こゝには古代に於ける方言の例を述べてこれに代えることにする。万葉集に於ける東歌・防人歌にはこの種のものを見出し得る。

タチコモノ（鴨）　サユル（百合）　アヲグム（雲）
タタミケメ（薦）　ツク（月）　クフシ（恋し）
ヨソル（寄スに対する自動）

などは、明かに同化性の見えるものである。已述の如く古今集の甲斐歌には、

ケケレナク（心なく）

という語が見えて、正常の語には最も少いエ列音の同化語の例を見せているのは興味深いものである。

万葉集には我が九州に於けるけざやかな訛音を求めることは難い。それ故自分はこゝに集に見える九州の地名について、その俗訛音のことを言って見たい。その一つは杵島岳の歌である。肥前風土記によると、

あられふる　杵島の岳を　さがしみと　草とりかねて
妹が手をとる（原文真仮名）

という歌を、地方の男女の杵島岳に登望遊楽する際うたうものであるとし、その下に「是杵島曲（きしまぶり）」という註のあるのを見ても、もと地方歌であったと見るべきである。然るに集には、仙柘枝歌三首の中に

霰ふり　吉志美がたけを　険しみと　草とりかなわ
妹が手をとる

とある。これは、柘枝の作に紛れ入ったらしいが、もと風土記のそれと同一歌であることは争われない。そうすると、キシミはもとキシマでなくてはならないが、これはキシマの上二音がイ母音であるので、マが同化したのではないかと思う。この歌は中にトリカナワなどいう訛りらしいものがあって、地方人の無意識に俗音のまゝ言い伝えていたのが、書き残されたものではないかと考えられる。これも

俗訛音の例ではなかろうか。

次に豊前に香春という地名がある。風土記には鹿春ともあり、字面上カハルと読まるべきであり、集には

豊国の　加波流は我家　紐の児に　いつがりをれば
　　革流は我家

とあるから、古くカハルと言われたことは動かない。然るに今はカハラと呼ばれる。これは上にア母音が二つゞくので、下のルが同化してラとなったと見るべきである。思うに九州で「原」をハルということは、周く知られていることであって、古く言ったカハルのハルは「原」と同一義であったかも知れないのに、今ハラに変って九州の「原」の義を亡っていることは、一種の皮肉でもあるが、これは近代人の母音同化である。

今一つ集の巻十五の有名な遣新羅使の船中の歌に次の詠がある。

可之布江に　たづ鳴きわたる　志賀の浦に　おきつ白浪　立ちしくらしも

このカシフエが、今の香椎浦を指していることは、志賀浦に対しているのでも明かで、たしかに古名を残したものである。カシフは「樫生」であり、応神記の国栖の歌に「加志能布」とあるのと同義で、樫の木原のことである。然るに記には「訶志比」とあり、紀には「橿日」とあり、集には「香椎」とあって、已にカシヒになっている。思うにこれは古いカシフのフがシの影響でヒと同化した形であって、一種の訛音であると自分は信ずる。少くもカシフの方が意味がよく通ずる。書紀が橿に連想をもっただけは正しかった。樫が椎にかわるなども笑話めいたことである。

以上は地名が地方人の口によって変るのに、母音同化の力によった例である。集に出た九州の地名で母音同化のものには、安良津・能許島・也良崎・引津・可也山・大野山・木綿山・壱岐などがあるが、地名にはこの種のものがかなり豊富にあって、意味のわからないものが多い。

第六、外来語の国音化。国語は語の中に子音だけ単独に入るのを許さず、必ず母音を伴う特質をもっている、他の語でいえば、すべて開音節から成立っている言語である。それ故単独な子音を発音することは、日本人には不得手である。我が国に輸入された漢語（漢字音）には、語末に子音を以て終るものがある、かの撥音とか入声とかいうものがこれであって、それらは国語音では皆母音をもたせて、古くからム（m）・ニ（n）・ウ又はイ（ŋ）・フ（p）・チ又はツ（t）・ク又はキ（k）を入れるのを通則として、読書音にも用いた。しかるにこの語尾がその通則にはずれることが屢々ある、そうしてそれは母音同化によることが亦通則のように見える。

ハカセ（博士）　シユジャカ（朱雀）　ダイトコ（大徳）　セウソコ（消息）　トウシミ（燈心）

などを見れば、このことが明かであろう。博士の士がセとなったのは、やはり上のハカに引かれて、中間のエ母音になったものであろう。スゴロク（双六）という語は、その物と共に、相当早く伝わっているが、古くはスグロクといった。グは双字の音尾ŋの原音に近く発音された古形であるが、双字の音はア母音にしてサグといった方が近いのに、スとなったのは、やはりグの母音に引かれたらしい。後のスゴロクは更にグがロに引かれたもので、かゝる所にも同化の力は行われている。

欧米語の子音の単独に入ることは、言うまでもないので、亦我等にはその発音が困難である。それも語学として学習したものは、比較的原音に近く摸倣されるが、通俗人はこれをまねるのに、自然母音を伴わせるのであって、その際は不思議に語中の母音而も隣接する母音を入れることが普通に行われる癖である、**glass**をガラスといい、**Ink**をインキというのはそれであり、**English**をイギリスというのもそれである。**Aflica**をアフリカというのは原音に近いが、古くアヒリカといったのは**f**に隣の**i**を補ったからである。初めて来た宗教語を民衆がまねた時に、この事がけざやかに表れているから、左にその数例をあげる。

キリシト	**Christo**
バアデレ	**Padre**
ガラサ	**Graca**
ケレイド	**Credo**
エケレシヤ	**Ecclesia**
サカラメント	**Sacramento**

これらを見ると、皆その補う母音を、必ず隣接の母音に求めて来るものであって、明かに母音同化と同一性の現象と言わなくてはならない。

五

以上注意すべき六つの条目について見て来たが、母音同化という現象は、我が国語に於ける相当強い傾向であって、たしかに国語音韻の一特質といってよく、そうしてそれは今日まで行われているといってよいと思う。

この小稿はかつて（昭和二十四年十一月）国語学会（福岡）に於て試みた講話を、再び補訂して筆にしたものである。読返して見ると、いわば普通講義めいて、極めて薄味のものであるが、集めて来た鶏肋は、老いの身に捨てがたくて、あえて活字にしていただくことにした。

昭和三十一年十月五日稿